

被災者思い一心に

熊本地震 岡山学生ボランティア同行

熊本地震の発生から半月以上たっても、被災地には痛々しい光景が広がっていた。それでも人々は、日常を取り戻そうと懸命に前を向いていた。岡山経済同友会などが3、5日に派遣した岡山県内の大学生らによるボランティアに同行、被害が大きかった熊本県益城町で小学校の授業再開に向けた作業に加わった。(多田和代)

11面関連

熊本市内から益城町に向 前まで、ここにも生活が
かろう道路沿い。1階部分が ったはずなのに」。中国短
押しつぶされた民家、灯籠 大2年小川涼華さん(19)は
が散乱した神社が揺れの激 表情を曇らせた。
しさを物語る。ブルーシー 活動場所の町立広安小学
トで覆われた屋根、建物倒 校は、なお300人近くが
壊の危険度を示す赤や黄の 身を寄せている。長引く避
張り紙も目立つ。 難生活での疲労に加え、授
業再開のために場所を移る
「ニュースの映像で見る 業再開のために場所を移る
のと衝撃が全然違う。少し ストレスもあるのだろう。



車中泊が続く広安小学校の校庭で、授業再開に向けて整地する学生ボランティア=4日

小学校再開へ整地、床拭き

初日の3日は土砂降りだったこともあり、学生が廊下や階段を掃除しているも校舎内の空気は重かった。昨年、同友会の派遣で東日本大震災の被災地支援に参加した山陽学園大2年岡馬凜太郎さん(19)は「東北は被災者の自立を助ける段階だったが、ここはまだ生活を取り戻すのに精いっぱい。ボランティアも被災者の気持ちに寄り添わなければ」と話した。

駆け回る子ども

翌4日は天気も回復し、約150台で車中泊が続いている校庭の一角を、授業で使えるようシャベルやトンボで整地した。

早速、子どもたちが駆け回る。近くの小学2年男児(8)は「新学年になってからの友達と長く会えてなくて寂しいけど、いっぱい走って楽しかった」。罹災証明書申請のために学校を訪れた同町の吉原辰義さん(76)は「余震の怖さは続くが、子どもたちの明るい声が聞こえるだけで元気になる」と頬を緩めた。

最終日の5日は体育館の床を拭き、段ボールベッドを組み立てた。9日の授業

再開後、校舎内の避難者には安全性の調査が済んだ体育館や特別教室が充てられる。就実短大2年川崎泉さん(19)は「歩くと床がたわんでいるのが分かる。少しでも良い環境で過ごしてもらいたい」と一心に手を動かした。

困難続く現地

「子どもたちが校庭で遊ぶ姿がうれしかった。小さなことかもしれないが、役に立ってたように思えた」。活動を終え、環太平洋大4年永田陽平さん(21)は語った。

黒住宗道団長(岡山経済同友会教育問題委員会副委員長)は「難しい時だからこそ、学生たちが学ぶことも多かったのではないかと自分で見て、感じたことを忘れず、被災地、被災者のために何ができるか考え続けてほしい」という。

混乱は収まりつつあるように見えるものの、多くの困難が続く被災地。「生活再建には行政や住民、ボランティアなどが一丸となる必要がある」。活動を仲介した国際医療ボランティアAMDA(岡山市)の理事で広安小出身の難波妙さん(52)は訴えた。

取材メモ

寄り添う支援探りたい

▽:「うまく言葉にできないけど、

▽:避難所の人たちは掃除の物音に

く考えさせられた。

▽:広安小では地震発生直後から、A

大きな喪失感を感じた」。熊本市出身の岡山県立大4年熊本菜里奈さん(21)はそう漏らした。見慣れていた故郷の景色が一瞬にして壊れる。そのことの厳しさ、無念さを間近なものとして痛感した3日間だった。

もナーバスになっているという。取材となればなおさら、多くを失ったばかりの心を逆なですることにならないか。ボランティアの「手伝いたい」、マスクの「伝えたい」。被災者に本当に必要とされているのは何かを、深

MDAが拠点を置いて信頼関係を築き、安心して生活できる環境づくりに努めてきた。人々は重い気持ちを抱えながらも、懸命に生活再建を目指している。立ち上がろうとする気持ちに、どうすれば寄り添えるか。探り続けていきたい。(多田和代)